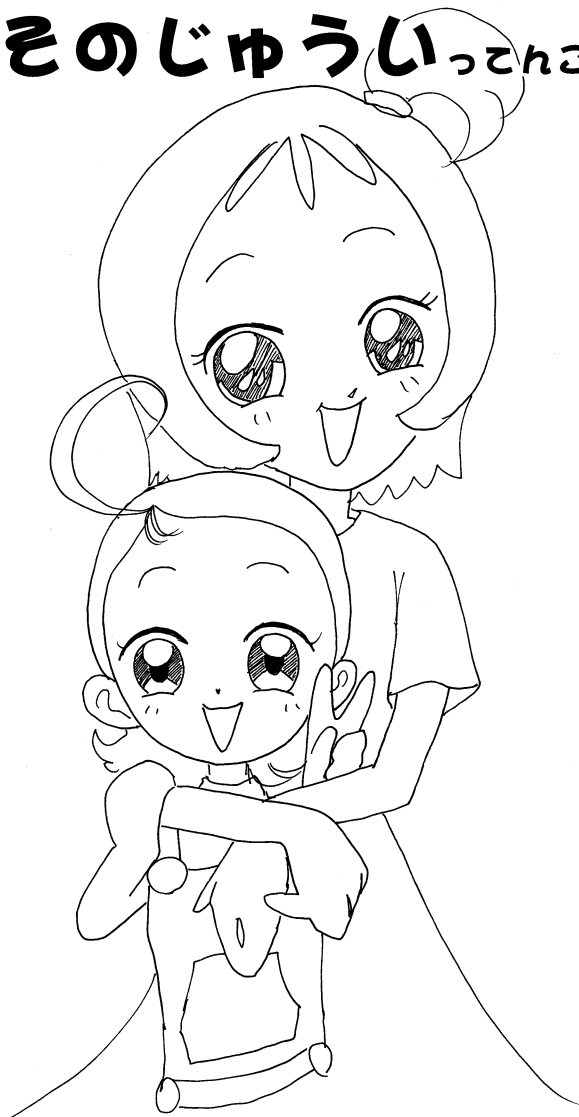


どれみなのはなし

そのじゅういってんぞ



あしたはあした

「なあ、おんぶちゃん」

ふう。

「なあなあ、おんぶちゃんて」

歩いてるわたしの腰のベルトに、ちっちゃな手がしがみついている。

「おい、おんぶちゃん」

目だけちらつと横向けた。どう見たって

「くらあー無視しなや」

5歳児よねえ、あいちゃん。

ああ、なんでこんなことになっちゃったんだろ。

最初は　そう、わたしの誕生日。今年は平日だし、あいちゃんも2月にこっちに来たばかり。だからせて、MAHO堂でおめでとっただけ言ってくれ

る、ってことだったのよね。

美空町と、アメリカと、あと大阪にもあったMAHO堂。その奥にある、ホントは魔女界につながってたとびら。半年前、ハナちゃんがとびら同士つなげちゃってから、声だけ大阪とアメリカに届くようになっちゃった。

みんな週に一度はそれぞれのMAHO堂に集まって、おしゃべりしてたわ。だから、いつもの通り集まって、いつもの通り声だけの乾杯して。今日は誕生日とひな祭りだから、って、みんなで持ってきた飲み物も飲んで——それが、いけなかったのよね

「ねえねえ、このとびらってさ、ホントに開かないのかな？」

とびらの向こう、美空町のMAHO堂から聞こえてきたのは、どれみちゃんの声やった。

3 あしたはあした

大阪のMAHO堂。奥のとびらによっかかって、おんぷちゃんの誕生日パーティー。

目の前にはだーれもおらへんけど、あたしが作っ
たひなあられと、ももちゃんのケーキ、それにどれ
みちゃんたちからの飲み物。あられポリポリつまみ
ながら、背中の向こうとしゃべってるだけで、美空
町にいるみたいない気分や。

「開かんと思っけどなあ。前、マジヨリードさん言
うてたで。』女王様くらしいの魔力がないと、無理には
開かへん』て」

大阪のMAHO堂は、あいかわらずがらーんとし
てるわ。ええかげん慣れたけど、趣味渋すぎやな、マ
ジヨリードさん。

「うーん　でもさ、それ聞いてから、もう半年も
経ってるじゃん。ちょーっとゆるくなっちゃったと
かって、ね?」

ね?　て言われてもなあ。

「よし、開けてみよ　ヒヤッ」

ん?　なんやいまの。まさか

「あゝあたしが、いま開けたげっから。ヒッ」

ちよ、ちよいちよい!!

「こ、こら、ちよい待ちやどれみちゃん!　壊れた
ら、あたしらには直せへんで!」

「だーいじぶぶ、だーっ。壊れたときには、とび
らは開いてるっば」

さっきから言っことおかし思てたけど、こら
酔つてんな?

「はづきちゃん、おんぷちゃん!　その酔っぱらい押
さえてえな!!」

「だ、だめ。ふたりとも引きずられちゃうわ!」
おんぷちゃんの声が上ずつとる。こら、シヤレに
ならんで。

「だあし、酔わせたノ!」

「そんな強いお酒なんて　痛っ!　どれみちゃん、
蹴らないで!!」

あああ、とびらの向こうで、何やってるんやあ

「あ」

へ？

「あの、サ。ケーキの箱、見てくれる？ はづきちゃんに頼まれてたもの、一緒に送ったんだけど」

ももちゃんの声、なんや怯えてるみたいや。

「ケーキの？ あ。お菓子用の、チエリーブランデー、からっぽ」

「あほお〜ツツ!!」

「ごめんなさい」

ああ、とびらの向こうから、へらへら笑ってる声が近づいて来てる。

あかん。このままやと、ほんまに壊されてまうかも せや！

「ももちゃん、聞こえるか？ ふたりでよっかかって、とびらまもるんや。せえ、のっ!!」

「よいシヨ!! あ、うあわあアア!?!」

背中がとびらに当たったとたん、そこがすうっとなくなつて、そのまま天井が遠なつて !

あててて。いきなり開くなんて思つてへんから、思いきり突っ込んでもうたやんか。

目え開けたら、おんぶちゃんとはづきちゃんの顔が見えた。

なんや、変な顔であたし見てるなあ。後ろでれみちゃんが踊てるけど、関係ないみたいやし ああ、そか。

「痛い痛いけど、心配せんでええよ。おんぶちゃんの誕生日に来れたんやから、こんくらいどっつちゅうこと」

ん？ まだ変な顔しとんなあ。それによお見たら、心配してる顔やない。どないしたんや？

「おい、ふたりとも、どないして え!?!」
振った手えが、えらいちつちやいわ。まるで

「Unbelievable」

背中から聞こえてきた、ぼーっとしたももちゃん
の声に振り向いたら、子供がおった。どう見ても
会ったばかりのぽっぷちゃんくらいなの。

って、ことは。まさか！

立ち上がったもも、おんぷちゃんの顔に届かへん。

やっぱりや。

「ち、縮んでもうた!!」

「ふーん、こないなとこにスーパーあるんかあ」

結局、どれみちゃんは酔っぱらったままだし、ふ
たりをそのままにしとく、ってわけにもいかないか
ら、治せそうな人に会いに行くことになったのよね。

小さなももちゃんには、はづきちゃん。小さなあ
いちゃんには、わたしがいっしょについて。

「おんぷちゃんと買出し、ちゅーのも、久しぶり
やなあ」

ええと、たしかあの奥だったわね。

「ん？ 何買っくんや？」

ああ、あったあつた。じゃ、粉ミルクと

「へ？」

ベビーパウダーもね。

「ちよい待ちや？」

あと、紙オム

「おんぷちゃん？」

手を伸ばしたまま、あいちゃんの方をいたら、

「いまやったら、まだシャレで済むで？」

うわ、笑顔だけどすごく低い声。ちよつとやりす
ぎたかしら。

「ごめんごめん。わかってるってば」

手をちよつと横にずらして、手に取った。となり
にあった、高級な紙オム

「もつ、やめつちゅーに!!」

手を振り回してほかほか叩いてくるあいちゃん見
て、ちよつと安心した。まだ、ほんとに笑えるみたい。

それにしても、このまま、ってわけにはいかないわよね。

いろいろ棚に戻したあと、おんぶちゃんがスーパーで買ったのは、アメ玉一袋やった。

なんや、あたしからかうために入ったようなもんやな。せやけど、アメひとつなめてるだけで怒る気にもならへん。まさか、頭ン中まで5歳になってもうたんちゃうやるなあ？

ううう。考えたら寒うなつてしもたわ。

「なあ、これから、どうすんねや?」

おんぶちゃんの顔、上向かんと見られへん。あ

かんあかん。悪いこと考えてても、しゃあないやん。

「そう、ね。とりあえず、何か知ってそつな人に会いましょ」

うん。そらわかるんや。そやけど。

「はづきちゃんは、ゆき先生とこ行つたんやろ? あたしら一緒んでええんか?」

「ん? うん。私たちは別の人に会いに行くのよ」

別の人がやて? 魔法がわかる人なんて、ゆき先生のほかに誰がおつたか?

「あ、ちよつと待つててね。電話かけてくから」

言いながら、その辺きよるきよる探し回つてる。

「携帯使わへんの?」

「携帯使つと、残つちやうでしょ? この番号は、わたししか知らないから。あ、あつた」

携帯に番号残せへん、て。ほんまわからんわ。そ

んなん、いったい誰や??

「お待たせ。じゃ、行きましょ」

こども料金のきつぷなんて、一年ぶりやなあ。ま、この体も悪いことばかりやないか。

7 あしたはあした

美空町から電車で40分。降りたのは、あたしの知らない駅だった。

美空町より都会やけど、あんま「ミミ」してへん。なんとなく品のええ町や。歩いてる人かて上品な

「あら、おんぶちゃん。妹さん？」

その上品なおばあちゃんに、いきなり声かけられてもった。おんぶちゃん、ちゃんと変装してるんに、よおわかったなあ。

あ、おんぶちゃんがべこつて頭さげてん。知り合いなんかな？

「友達の妹なんです」

ああ、あたしも頭さげとこか。

「誕生日のプレゼントに妹が欲しいな。って言ったら、一日貸してくれたんですよ」

「そう。あなた、おんぶちゃん好き？」

あはは。まるつきり幼稚園児や思てるな？ それやったら

「うん。あたし、おんぶちゃん、大好っきゃ♡」

声ちよい高くしたつたら、ええ感じになつたわ。おばちゃんはにこにこ笑てんし、おんぶちゃんは真つ赤になつてんし。くくく。

「そ、それじゃ、失礼します」

「はいはい。またね」

「あいちゃん！」

おんぶちゃん、あたし抱えてビルのかげまで走つたつたわ。もとの大きさをやたら考えられへんな。

「ん？ もつかい言つてほしいんか？」

あ、まゝた赤くなつてん。かわええなあ♡

「もう。行くわよー！」

ピンポーン

駅出たときは知らんとこや思てたけど、ちゃうわ。

ここはビルの4階にある、芸能フロのドアの前。

しっかし、変わってへんなあ。もう4年も経って
るっちゅうのに。看板までおなじじゃんか。

「いいよ、奥に入って」

へ？

中から聞こえてきたんは、なんや妙に聞いたこと
ある声やった。まさか？

「げ！」

奥のとびら開けたとたん、目の前にでて来たんは
あの顔や。

「なにが、『げ！』だい？」

いや、そらさすがに失礼やろけど、せやけど。

「ちよ、ちよい待ちや？ なんでマジョルカが、まだ
ここにおるんや!？」

「なんで、って そりゃこの社長だからに決まっ
てるだろ？」

芸能プロダクシヨンの社長が、そんなにコロコロ
変わったらまずいじゃないか。 ああ、女王様に

は、ちゃんと断つてあるよ。」

はあ。よお考えたら、ゆき先生やリリカおばあちゃん
かて、まだこつちおるんやったわ。マジョルカが
いたかて、おかしなもんかもしれへん。けどなあ。

「それより、お前はどうしたんだね、その姿？」

ああ、相談できる人つて、マジョルカやったんか。
そら電話番号も残せへんわ。

さーて、どう説明しよか思てたら、おんぶちゃん
が前に出た。

「ね、マジョルカ。MAHO堂のとびらのことつて、
知ってる？」

「な、なんのことだい？」

いきなりどもってるやん。あやしなあ。

「ふうん。へへ、いる？」

「なあによあ」

奥の戸棚が、パカンッと開いて、チヨコ色の妖精
がふわふわこつち向かって来てん。いつもは、あん
なとこに隠れとつたんか。

おんぶちゃん、にやつと笑てる。

9 あしたはあした

「昨日の現場で、口紅もらっただけだな」

あ、へへの目えが光っとるわ。

「春の新品よ。発売は4月だから、まだだーれもつけてないんだ」

「え!? 使っつー! 貸して貸して♡」

すんごい勢いでおんぶちゃんに突っ込んでったら、出てきた本にどーんと体当たりや。

「いったーいっつ!! なーにすんのっ!」

おんぶちゃん、また、にやーって笑てるわ。なんや、ちよい怖いなあ。

「でね、MAHO堂のとびらのこと、知ってる?」

おんぶちゃんが背中に隠した口紅見ようとして、びよんびよん飛び回ってたけど、あきらめたみたいや。

「ん〜。新しい女王さまが遊んでてつないじやったつて、あれのこと?」

「そうそう。あれ、変な副作用があるんだつて?」

「そーよ。なんでもね、無理に開けようとするとおかしなことになるんだつてや」

おんぶちゃんのまわり、くるくる回ってる。ときどき、ちらっと手の方見てるけど、おんぶちゃんがつまく隠してるわ。

「へえ　で、治し方は?」

「しらなーい　ああん!」

へへがそっぽ向いたとこ、おんぶちゃんが口紅チラチラさせとん。ははは、ちよいえげつないなあ。

「で?」

「しよおがないなあ　それ、マジオルカが作った罫だよ」

ワナやて?」

「はあ　」

背中の中、おっきなため息や。振り向いたら、マジオルカがイスの背もたれに頭乗せとった。

「そりゃ罫もつけるさ。あのとびらは、魔女界にもつながつてるんだからねえ。　間違つて誰が入ちまったら大変じゃないか」

「それでさー、マジオルカつたら、無理にあけると

赤ちゃんになっちゃう魔法かけといたんだー」

マジョルカが、ぶんっ、て手え振った。けどへへ、平気な顔でひよいひよい避けとるわ。ええコンピヤなあ。あ、あかん。見てる場合やなかった。

「あたしら、そんな無茶なことしてへんで？」

「二人でとびらにぶつかつたんだろ？ 多分、無理に開けたと勘違いしちまつたんだよ」

あたしらの方、見もしてへんし。

「でも、赤ちゃんになっちゃうんじゃ」

「二人だから、効果も半分になっちまつたんじゃな
いかねえ」

ひとごとみたいに言いよつてからに。このッ！

「マジョルカ!!」

び、びっくりしたわ。あたしより先に、おんぷちゃんが思い切りどなってるんやから。

マジョルカも、ため息つきながら立ち上がったわ。

「わかってるって。ちよっと調べようかね」

「そういや、おんぷ。ここに来る前、環さんに会わなかったかい？」

へへのいた戸棚からクッキーもろて食べてたら、魔法の事典めぐりながら、マジョルカが訊いてきた。

「仁科さん？ さっき、駅の近くで会ったわよ」

駅の近くで　ああ、あの品のええおばあちゃんやな。仁科さん、ちゅうのが。

「ああ。じゃ、聞いたかい？ 向こうはいつでもいい
そうだよ。おんぷの準備さえできれば」

「ちよ、ちよっと！ あいちゃんもいるのよ。その話
なら、後にして!!」

「なんだ、まだ言っていないのかい？」

そう言つて、チラッとあたしの顔見てるわ。なんの話や？ あたしに聞かせたないことみたいやけど。

「いいから！ とにかく、あいちゃんを元に戻すのが
先よ。ちよっとお化粧行ってくるから、帰って

くるまでに調べないと、もう仕事しないわよ!!」
ボタン! って、大きな音たてて事務所出て行って
もつた。えらい剣幕や。

それにしても、や。

「マジョルカあ、仁科さんの話って、何なんや?」

「あたしや言わないよ。言ったら仕事しない、なん
て言われちゃね」

ありや。そつば向いてもつたわ。

「せやけど、気になんなあ。あたしらに言えへんこ
と、て」

そつば向いたまんま、目え閉じて黙ってもつた。こ

ら、どうしても言わんつもりやなあ。はあ。

「星ってのはね、窓の外で輝くもんさ」

へ? なんや、いきなり?

「そら、いったい?」

言いかけたところで、目の前にひらひら手え振ら
れた。

「ひとり言さ。それくらい、言ったっていいだろ?

いつくら大事な星だつて、窓の中に仕舞つと
こつてのは間違いだよ。無理に閉じ込めといちゃ、
輝きが消えちまうさ。

まして、自分で輝きたい、って言つてんだよ。窓
の中にいるあたしらが、それ止めてどうするつてん
だい?」

窓の外の、星——ちゆうことは、や

「仁科さん、ちゆううん、ひよっとして、外国に住ん
でるんやないか?」

「そうさ。もう引返しちまつたけど、アメリカ中わ
たり歩いた、すごい舞台女優だよ」

そつか。そやつたんか

誕生日や、ちゆううんに、昼間つからあたしらと
MAHO堂おつたり。小さくなつたあたし、からこ
うてみたり。ったく。

あたしは、ひとつ息吸つた。

「あたしも、それで星が輝くんやったら。それやつ
たら、窓の外に行くべきや、思つわ」

素直に言えたわ。うん。自分の気持ち、なんもごまかしてへん。

そやから、マジョルカが開けた目え見ても、あたしは驚かへんかった。

「そうかい。ありがとうよ」

おかあちゃんみたいな、あつたかい目。あたしも、同じ目えできたら、ええな。

「マジョルカ、わかった？」

事務所のドアが開いたかと思たら、いきなりこつや。

あたしは、なんやおかしなつて、くすくす笑てしもた。

「？ まさか、何か変なこと聞いたの!？」

「いんや。ただ、星の話してただけや。な」

あたしは、マジョルカと目え見合わせた。ウソはひとつも言つてへんからな。

「ああ。で、元に戻す方法だけどね。まあ、多分つてとこまではわかったよ」

「じゃ、急がないと。夜になつても帰れなかつたら、あいちゃんのママが心配するわ」

言われて外見たら、もつ暗くなつてんわ。夕飯のしたく、サボつてしもたな あん？

びよびよびよ

なんや、この音は？

「あら？メールみたい。はづきちゃんの番号だけど あ、ゆき先生からだわ。『マジョルカをつれて MAHO堂に来なさい』だつて」

はあ、さつすがゆき先生。あたしらがここに来てんの、わかつてるんやなあ。

「先代女王様のお呼びなら、直通で行くとしようかね。ふたりとも、こつちおいで」

「よ　　しよ、つと」

事務所の物置から暗い道歩いて、出てきたのはM A H O 堂の暖炉の中やった。また、えらいところなげたもんや。使ったら灰だらけになるとこやんか。

「あ、はづきちゃん　あれ？」

M A H O 堂にいたんは、はづきちゃんだけ　と思たら、足元に小さなももちゃんど、酔っぱらってるどれみちゃんが一緒なつて眠ってん。

「どないなつてんのや？」

「ゆき先生、いままでいたんだけど　どこかに行っちゃったみたい。ももちゃんも、さつきまで起きたただけど、ね」

そついや、アメリカはもう明け方なんやつたな。無理あらへんわ。　酔っぱらいの方はともかく。

「まったく、ゆき先生も無責任ねえ」

腰に手え当てて、おんぶちゃんが怒ってる。

「そりやそつさ。本来、人間界に影響を与える魔法なんて許されないんだからね」

「マジヨルカ？」

マジヨルカが、なんやひらひらさせながら、こつちやつてきた。メモやるか？

「先代女王様からだよ。この件は、あたしに任せろ、つてさ。ほら、そつちの子を起こして、二人ともとびらに背中くつつけな」

あたしが起こしたつたら、ももちゃん寝ぼけてしがついてきたわ。しゃあないから、抱えたまんまどとびらんとこ行つて、一緒によっかつた。

「いいかい。これから、あたしが扉にかけた罫を逆に働かせるから。二人とも、もといた場所に転がり出ることになるから、気をつけるんだよ」

おんぶちゃんとはづきちゃんが、心配そうに見てるわ。けど、あたしは安心して目えつむつた。

さっきのマジヨルカ。あの、おかあちゃんの目えできるマジヨルカやったら、信じられるわ。うん。

「とびらもまた閉まっちゃうからね、今度は、無理に開けんじやないよ さあ、いくよ！」

とびらの向こうで、はづきちゃんたちが帰ってくる音がする。あたしは大阪のMAHO堂で、とびらによっかかってその音聞いてた。

ちよい、つと手え伸ばしたら、ちゃんとドアノブつかめる。ああ、やつはこの体の方が楽やな。

「あいちゃん、まだいる？」

MAHO堂のとびらに寄っかかってんの、あたしとおんぶちゃんだけになってもうたみたいや。

「ああ。しっかし、ろくでもない誕生日になってもうたなあ」

「そう？ わたしは楽しかったけど」

よつ言つわ。あんだけどなりまくつといて ああ、そっか。

「そら、一日妹がプレゼントに行ったんやからな。楽しなかったら困んで」

あはは、くすくす笑てんわ。ああ、昼間の顔、思い出してまうなあ。

「また、声だけになってもうたなあ」

あたしが言つたとたん、おんぶちゃんの声が、ちょっと低なって

「やつぱり、顔見ないと耐えられなくなっちゃうのかな？」

あたしに聞こえないようにしたんやろっけど、まる聞こえやで、ちっちゃなため息。

もつ しょおないなあ。

「おんぶちゃん、好っきゃ♡」

「え!？」

あ、声戻ったわ。

「おんぶちゃん、大好きやでー♡」

「な、なによ、いきなり」

くくく。また、あの真っ赤な顔が見えるみたいや。

けど、楽しんでる場合やないな。

「マジョルカが言つてたで。星いうんは、窓の外で輝くもんや、て」

せや、後悔するおんぶちゃんなんて、見たないわ。

「あたしが好きなのは、輝いてるおんぶちゃんや♡
せやから、遠慮せんと、なんでも言いや」

なに言われたかて、変わらへん。あたしは、いつでも、いつまでも。な。

「まだ、言えないわ。待つてくれる？」

おんぶちゃんの頭が、とびらにコツン、て当たる音がした。うん。今はええわ、そう言うてくれるだけ。

あたしも、とびらに頭もたれた。あつたかいんは、つながってるんは、とびら越しやない。

「ゆつくり考えてええよ。あしたは、あしたや」

—おしまい—

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは“金井亭 猫好”です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしくお願ひいたします。

追記：私の書く文は、条件付きですがコピー可です。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 2004年3月14日